

第7章 その他

「ソマリアに見る開発の可能性」
アフラシア研究会(竜谷大・深草 08年5月17日)

CARE International Japan

黒川千万喜

発表者： Dr. Peter Little, Prof Emory University
(現在、京大アフリカ地域研究センター客員研究員)

ソマリアは政治的、社会的混乱の続く東部アフリカの中でももっとも厳しい状況下にある。1990年代初頭より、中央政府は名前だけか全く存在しない時期が今日に至るまで続いている。冷戦時代の大国の援助や、最近の近隣諸国の介入で民兵組織が膨大な武器を保持して「中央政府」らしきものに挑戦し続けてきた。実質中央政府不在の時代がこれほど長く続く例も珍しいが、そのような環境下で人々はどのように生計を立ててきたのか、興味深い研究報告である。

現地経済を支える主力産業は放牧による家畜(主として牛、羊)飼育であり、主たるマーケットはサウジアラビアである。治安が極端に悪い地域において、現地の人々が昔ながらの形で放牧を行い、長距離を運んで国境を越えて輸出する活動を維持してきたことは驚くべきことである。興味深いのは、現地通貨(ソマリアシリング)が交易の主役であり、かなりしっかりした通貨価値を維持していることである。詳細は不明だが、通貨を発行、維持する仕掛けが確立されている、しかも中央政府不在の中で。これには逆に活発な牧畜産業の存在が大きな貢献をしていることは十分に考えられる。

この通貨制度に助けられて、ソマリアを含む東アフリカ地域(エチオピア、ケニヤ)では家畜以外にもメイズ、ソルガム、米、小麦粉、茶、米、砂糖、衣類、エレクトロニクス製品などの国境を越えた交易が活発に行われている。

最悪の政治、経済、社会環境の中で維持されてきた放牧と交易活動は開発の視点からも大いに注目すべきであり、調査が進むことが期待される。

2007年より、隣国エチオピアの介入でようやく中央政府が回復された。予断は許さないが国際社会としても注意深く援助の手を差し伸べていくべきである。